

---

# 罪の天秤(Fate/stay night & zero)

Rozen Vamp

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罪の天秤 (Fate/stay night & amp; zero)

### 【Nコード】

N0500BA

### 【作者名】

Rozen Vamp

### 【あらすじ】

もし第四次聖杯戦争の開催が十年遅れていたら。  
そんな作品コンセプト。

この作品は新しい月の管理人である朔夜様がArcadia様に投稿された『第四次聖杯戦争が十年ずれ込んだら』から一部設定をお借りしています。

## 01・冬の森にて

/ 1

常冬の森。

地平の彼方までを埋め尽くす根雪と乱立する針葉樹。青空を覆い隠す灰色の雲だけが、その世界の全てだった。

およそ人の寄り付かぬ僻地には一つの城があった。古城と呼んで差し支えない、文字通りに中世から変わらぬ姿で存在し続ける城。その城に住まう者達はある妄執に囚われていた。千年余りに及ぶ懇願。行き過ぎた祈りは狂気に染められ、彼らを憎しみに駆り立てた。

かつて自らのものであったものを、他者と争い奪い取らなければならなくなつたことへの憤怒。都合三度の闘争を経てなお未だ手に握めていないという事実に対する絶望。自らの家系における術者の戦闘能力の低さに嘆きを覚え

彼らは誇りを金繰り捨て実利を選び、外来の魔術師を招き入れた。

千年の純血を保ってきた彼ら　アインツベルンにとってそれは苦渋の決断であった。余所者を招き入れるということは自らの力では勝ち得ないと認めるも当然の所業。自分達の無能さを曝け出すにも等しい愚行だ。

それでも彼らは恥も外聞も誇りも純血も、それら全てを捨て去つても求め欲した奇跡を手に掴み取ると決断した。

失われた第三法。  
消えた天の杯。

悲願を遂げる為ならば、どんな汚泥さえも啜って見せると、アインツベルンは狂気により妄執を肯定した。

彼ら狂信者の期待を一身に背負った招かれし者 衛宮切嗣は、走り去る少女の背を追いかけながら、真綿の雪を踏み締めていた。

切嗣がアインツベルンに招かれたのは既に二十年も前のこと。  
本来ならば十年前に闘争の幕は開く筈だった。

けれど予定された開演の時刻になっても幕は上がらず、切嗣は長い時をこの城で過ごす羽目になった。

切嗣がアインツベルンの誘いを受けたのは、彼にも祈りと呼べるものがあつたからだ。

六十年に一度の魔術師の祭典。  
聖杯を巡るバトルロイヤル。

七人のマスターと七騎のサーヴァントの殺し合い。  
ただ一組の勝者にだけ、胸に抱いた祈りを叶える権利が与えられる。

アインツベルンの悲願はその最終地点。しかし切嗣の目的は彼らの悲願が成就する際に生まれる魔力の余波だけで叶えることが出来る。

奇跡を起こす聖杯ならば、この世界の内側において作用するほぼ全ての願いを叶えるだけの力を宿しているという。

世界の外側を目指す典型的な魔術師の悲願や聖杯の正しい用途を  
求めるアインツベルンの妄執にも切嗣は興味がない。彼にあるのは  
純真無垢な祈りだけ。子供の頃に抱いた愚昧な夢を、今なお見続け  
ている。

「なにしてるのー、おそいよー！」

前方を走る少女　イリヤスフィール・フォン・アインツベルン  
……切嗣の実子の声を聴きながら、苦笑を浮かべる。

妻であるアイリスフィールとの間にもうけた子。彼女の出生がた  
とえアインツベルンの当主であるユーブスタクハイトの要請であつ  
たとしても、切嗣はイリヤスフィールに愛情を持って接してきた。

血に塗れたこの手で我が子を抱くことが許されぬ罪であると知り  
ながら、その温かさに涙した。この二十年余りは、強迫観念に衝き  
動かされ続けてきた衛宮切嗣にとって幸福と呼んで差し支えのない  
時間だった。

五年ほど前に死別した妻を含めて、三人で過ごした時間。二人き  
りになっても、変わらぬ笑顔を浮かべ続けてくれた愛娘。

身に余る幸福。相応しくない幸福。人でなく、命の多寡を量る天  
秤であり続けた切嗣にようやく訪れた、人並の幸福。

……それを僕は、これから切り捨てようとしている。

差し迫る開幕の時。

十年遅れの開催となる第四次聖杯戦争。

切嗣の手には既に参戦の証である令呪が宿っている。  
十字架を模した三画の令呪。

それは切嗣の背負った罪の重さを表し、烙印の如き熱を帯びている。

……それだけじゃない。僕は、イリヤを

「もっつ！ キリツグ!？」

いつの間にか足を止め、掌に浮かぶこれまで浴びた返り血を幻視していた切嗣の前に、粉雪よりもなお白い髪の少女が頬を膨らませ紅玉の瞳で見上げていた。

「一緒に遊んでくれるって約束したのにつ！ キリツグったら上の空じゃないっ！」

「……ああ、ごめん。ちょっと考えごとをしていたんだ」

膝を折り、目線を合わせ頭を撫でる。少女の瞳は子供扱いするなと叫んでいたが、それも数秒で霧散した。少女はすぐに、悲しげに眉を寄せた。

「キリツグ……泣いてるの?」

「え……?」

驚き、男は空いた手で頬に触れる。そこには筋張った自身の顔があるだけで、涙の跡は見られない。

「泣いていないよイリヤ。僕は、泣いちゃいない」



かつての切嗣であったのなら、いとも容易く切り捨てただろう。だが今は違う。彼女の生まれからずっと、その成長を見守ってきた。妻と共に我が子の息災を祈り続けてきた。先立った妻の想いを受け取り、惜しみない愛情を注いできた。

それを切り捨てなければならないという葛藤。

最も守り通したいものを見捨てなければ叶えられない願い。

そして今更道を違えることの出来ない、己の生き方に絶望する。

初めに犯した原罪を贖う為に走り続けてきた。

そうすることで『彼女』の犠牲を無意味なものにせず済むと思っていた。

理想の尊さが余りに遠すぎて、膝から崩れ落ちそうになっても必死の思いで駆け抜けてきた。

どうしてその犠牲を裏切れよう。

我が身可愛さに、我が子可愛さに捨てられる程度の罪ならば、切嗣はこんなにも苦悩していない。

結論は始めから決まっていた。

だから心は泣いていたのだ。

何の罪もない我が子を自らの薄汚い理想の糧にしなければならぬ、その罪の重さに心は慟哭の悲鳴を上げていたのだ。

「ごめんな……イリヤ」

切嗣は切り捨てるだろう。

心を鉄に変えて。

自らの祈りの為にイリヤスフィールの人生を。  
自らの願いの為にアイリスフィールの想いを。  
自らの理想の為に、この二十年余りの幸福を。

この城で手に掴んだ全てを捨て去り、蒙昧な夢の果てへと走り続ける。

「泣かないで」

膝から崩れ落ちた弱い男を、少女は慈愛をもって抱き締める。その小さな身体と腕を精一杯に広げ、すすり泣く父の全てを抱き止める。

「大丈夫だよ、イリヤはキリツグの味方だから」

少女を殺す為の戦いに臨む男を肯定する。たとえ世界の全てが男の敵になっても、少女だけは彼の味方であり続けると。

「キリツグがアインツベルンに招かれて、お母さまと出会って、私が生まれた。そして一緒に暮らした今までの時間は、イリヤにとつての宝物だから。」

大切な……大切な想い出をくれたキリツグの夢を叶える為なら、イリヤはどんなことだって出来るよ。だから」

少女は想いの全てを込めて、男の額にキスをした。  
言葉では語り切れない心の全てを、たった一つの仕草に込めて。

「イリヤ……」

「一つだけ、訊いてもいい？」

「……………ああ」

「キリツグはお母さまと……………私と過ごしたこの時間は、幸せだった……………？」

「ああ……………勿論だ……………」

だからこそ心は悲鳴を上げ、涙を流している。過ぎた幸福と夢見た理想の狭間で、ちつぱけな人でしかない衛宮切嗣は枯れ果てるまで涙を零し続けている。

それでも自分自身とこれまでの犠牲を裏切れない切嗣は、少女の命を糧に祈りを叶える為に銃を執る。

血と硝煙の匂いに身を包んで。

罅割れた鉄の心の隙間から涙を零しながら。

理想の果てへと駆け抜ける。

「うん……………そっか。うん、イリヤも……………幸せだったから」

少女は自らに与えられた幸福を噛み締める。本来ならば与えられもしなかったかもしれない幸福だから。

十年の開催の遅延のお陰で少女は人並の幸福を手に出れた。父と母の愛情を一身に受けて育つことが出来た。

元よりこれから巻き起こる戦いの為に調整を施された存在だ。母であるアイリスフィールのように早世を約束されている身。ならば彼女にとってもこの二十年は、過ぎた幸福だったのだ。

身に余る幸福を手に入れ、そして父の祈りの為の礎になることが

出来る。だから少女は泣かないのだ。この身の犠牲に涙を零してくれる父がいるから。胸に抱いた理想と比して、それでも苦悩してくれる父がいるから。

その涙にこそ、イリヤスフィールは救われている。

「さあ、行こうキリツグ。願いを叶えに。理想の果てに。夢は見るものじゃなくて、叶えるものでしょう?」

「ああ」

差し出された少女の手を握り返す。柔らかな手。小さな掌。その温かさに触れながら、男は在りし日の自分へと立ち返る。

少年の日々に見た夢想　正義の味方。

その夢を張り通す為に。

世界でたった一人、正義の味方に味方してくれる少女と手を繋ぎながら。

男は戦場へと、その一步を踏み出した。

## 02・熾天より舞い降りた者

/ 2

アインツベルン城最上階。

広大なフロアに伸びたレッドカーペットを渡り、男と少女は最奥へと辿り着く。

見上げた壁面にはステンドグラスが輝いている。陽の射す時間の短いこの冬の森に僅かだけ降り注ぐ淡い光に染められながら。

「儀式の開始はもう間もなくだ。抜かりはないな衛宮切嗣よ」

最奥に構える祭壇で当主たるユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンが厳かに呟いた。切嗣は感情の色のない瞳を翁に向けたまま、抑揚のない声音で言った。

「ええ当主殿。無理を言ってお願ひした諸々についての感謝を此処に」

「構わぬ。それが勝利の為の布石であるのなら、我らアインツベルンは手の限りを尽くしたまでのこと。後は結果を出すだけだ」

「御意に」

「……イリヤスフィールよ、聖杯に問題は？」

「ありません。私に異常がないってことがその証拠です」

「宜しい」

蓄えた顎鬚を擦りながら老当主は眼下の二人を見つめる。二十年前に招来した外道魔術師と、過去最高の適正を有するホムンクルス。

「この十年の開催の遅延の原因については未だ我らを以ってしても辿り着けていない。しかしこのモラトリアムは我らアインツベルンにとつて有益なものとなった。

尽くせる限りの手は尽くした。切嗣、イリヤスフィールよ。必ずや聖杯の成就を。第三魔法の顕現を。天の杯を今一度我らの手に齎せ」

『はい』

二人の返事を聞き届け、アハト翁は目を瞑る。去り行く足音を聞きながら、心は此処ではない何処かへと向いていた。

原因不明の開催の遅延。その異常に早期に気付けこそしたものの、進められていた準備の数々は無為に終わった。

しかしこの十年という猶予期間で出来る限りの手は打った。他家に劣らぬ準備を終えたという自負がある。この布陣で負けるようなことがあれば、もはやアインツベルンは聖杯に手を掛けることが出来ないと思えてしまうほどの周到。

後は戦場へと赴く二人に託すのみ。

アインツベルン家当主として出来る仕事はもう何も無い。

「……もしこの遅延が、始まりの聖女たるユスティーツア様の導で

あるのなら」

冬の一族に勝利を、聖杯を齎す為の神の如き采配であると言うのなら。

老当主は一人淡く降り注ぐ陽光の中でほくそ笑む。

千年に及ぶ悲願の達成に想いを馳せて。

/

礼拝堂を辞し、切嗣とイリヤスフィールは儀式の場へと移動した。

差し迫る開演の時。

腕に刻まれた令呪は熱く律動し、彼方より来る者の招来を焦がれている。

差し当たってまず行うべきことはサーヴァントの召喚だ。七人七騎の殺し合いにおいてその存在を眩く輝かせる世界に祀り上げられし英霊達。

世に有名と覇を轟かせた人には御しえぬ英雄を聖杯の力を借りて彼岸より呼び戻す。そして自らのパートナーとして戦場を駆け抜けていくことになる。

「で、キリツグ。キリツグはもう喚び出す英霊は決めたの？」

「ああ。僕はこの戦いが英霊を使役する闘争であると知った時に既

に招来するサーヴァントは決めてある」

切嗣は自らの胸に腕を差し込み、体内より『鞘』を取り出した。

それは十年前、ユーブスタクハイトに無理を願い出て搜索を頼んだ聖剣の鞘。理想の王の手より失われた青と金で彩られた鞘。この世に存在しているかどうかも分からないものを切嗣は求め、アインツベルンは結果を出してくれた。

「僕が喚ぶのはこの鞘の持ち主であるアーサー王。最優とされるセイバーのクラスにおいておよそ最強と目される騎士の王だ」

聖剣エクスカリバーの担い手。

今なお世界中で伝説を語り継がれている、いつか蘇る王。

聖剣というカテゴリーにおいて頂点に位置する剣を手にし、その武勇は十二の会戦を経てなお不敗。単純な白兵戦闘では彼の王を上回る者もいるだろうが、総合力では世界の全てを見渡しても劣ることなど有り得ない。

切嗣がサーヴァントとしようと思論むのはそんな最強の一だ。

無論懸念もある。切嗣の気性と騎士達の王と崇められる彼の気性とは相容れない部分はあるだろう。聖杯という頂を目指す限り、その協定は覆らずとも軋轢はあるものと覚悟している。

そんなリスクに余りあるメリットがこの『鞘』にある。何もアーサー王を招来する為に聖剣の鞘は必須なわけではない。勿論この上のない触媒として機能はするだろうが、現存さえ疑われたものが必要条件な筈がない。

切嗣はこの鞘が見つけれなければ他のサーヴァントを見繕っていたことだろう。自身の気性と合致するアサシンかキャスターか、あるいは単純な戦力としてセイバーのクラスを求めたかもしれない。しかしこの鞘さえあれば全てを覆してでもアーサー王を喚ぶだけの価値がある。数百のパーツに分解し体内に秘め持てば、切嗣はサーヴァントにさえ劣らない魔人の如き戦闘能力を手に来ると踏んでいる。

切嗣の目論見とはつまるどころ、人の身でサーヴァントに拮抗すること。英雄達が覇を競う戦場に乱入し、人の身で凌駕すること。それが可能かどうかは分からない。実際に騎士王を召喚し、性能を試して見なければ不明瞭。それでも伝承を信じる限り、目算は誤ってはいないと考える。

「ふうん、そつか。じゃあ私はどのサーヴァントを喚べばいいの？」

ユーブスタクハイトが十年の歳月を費やし解き明かした令呪システムの一端。マキリが構築したシステムの一部分に触れ、イリヤスフィールの性能を用い不可能を可能へと改竄せしめた。

本来ならば不可能な筈である一陣営に二人のマスター。衛宮切嗣、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの両名共が、第四次聖杯戦争の正規のマスターである。

切嗣は当初イリヤスフィールがマスターとなることに反対を表明した。騎士王の戦力と鞘の加護さえあれば十分に勝ち抜けると踏んだからだ。

それを覆したのは他ならぬイリヤスフィール自身であり、彼女の

たつての願い故に切嗣は折れ、少女の参戦を許容した。

かつての切嗣であったのなら、そんな余分を抱え込む真似などしなかつただろう。勝利への最短経路を計測し、娘の懇願など切つて捨てたに違いない。

二十年余り浸り続けた微温湯で、切嗣は確実に劣化している。身体性能が魔術師であるが故に然程の劣化を見せておらずとも、心は色褪せている。

いいや、色づいたというべきか。

弛まぬ黒色であり続けた切嗣の心は、妻と子との長い時間の触れ合いにより違う色に染め替えられた。そしてその変化を許容してしまっている自身がいる以上、かつての自分を完全に取り戻すことなど不可能に近い。

文字通りにこの城で手に入れた全てを今此処で捨てられたのなら、あるいは可能かもしれない。

それが出来ない。心をどれだけ固めようとも、最後の一線が踏み越えられない。それを踏み越えられるのは恐らく、戦いの最終局。イリヤスフィールを切り捨てなければならぬ刻限だ。

必要に迫られなければ幸福を捨てられない、そんな弱さを抱えて切嗣は戦場へと赴くことになる。

だから切嗣は自らの劣化を少しでも補う為にイリヤスフィールの提案を受け入れた。いつか終わることを定められた少女の願いに、出来る限り報いる為に自らの信条を捻じ曲げたのだ。

父と命尽き果てるまで共にありたいと願った我が子の為、男は無様を晒したままに立ち向かう。

「イリヤに喚んで貰うサーヴァントは……」

この儀式場に集められた聖遺物ないし縁の品は数多に及ぶ。アインツベルンが世界を駆け巡り私財のほとんどを擲ってまで収集した召喚の触媒。

それはアインツベルンの今回の闘争に賭ける並々ならぬ執念の表れであり狂気の具現でもあった。

使えるものは全て使わせて貰うまで。

イリヤスフィールは好きなだけ選り好みが出来るが、その決定権は切嗣が持っている。それが少女が参戦する上での約束だった。

聖杯の守り手である彼女の守護を第一に考えるのなら、イリヤスフィールにこそセイバーを喚んで貰うべきだろう。しかしそれでは切嗣の性能がより劣化する。一魔術師、一マスターとして戦うことを余儀なくされる。

それでも十分に健闘は可能だろうが不安は残る。十年の猶予期間を与えられたのは何もアインツベルンだけではないのだ。遠坂にマキリも、かつてない周到な用意を済ませていると見るべきだ。

そんな連中に抗する為の切り札を防衛に回してしまうのは些か以上に勿体ない。切り札足りえるジョーカーを自ら無為に落としてしまつのは上手くない。

そう、戦闘能力の面でみればセイバーと切嗣で十分に事足りている。何もイリヤスフィールとそのサーヴァントに攻勢に出て貰う必

要はないのだ。

アインツベルンが二人のマスターと二騎のサーヴァントを従えていることを晒すのは上策とは言えない。矢面に立つべきは切嗣とセイバーだけで充分であり、イリヤスフィールとそのサーヴァントには後方よりのサポートを求めべきだろう。

「……………」

「キリツグ？」

思案の渦に囚われていた男を少女は不安げに見つめている。その様を見て取った父親は穏やかな笑みを浮かべ真っ白な髪を撫でながら、言った。

「イリヤに喚んで貰うサーヴァントが決まったよ」

そして遂に儀式が始まる。

聖杯戦争の足掛かりとなるサーヴァント召喚の儀。広い儀式場の中心に男と少女は背中合わせに立ち、互いに向かい合うのは各々の魔法陣。

血と鉄で描かれた紋様を前に朗々と歌は紡がれていく。

「我は常世総ての善と成る者」

「我は常世総ての悪を敷く者」

咲き乱れるエーテルの嵐の中、二人は身に宿した令呪の高鳴りと門を開く感覚に身を任せる。

彼方と此方を結ぶ道。その創造はあくまで聖杯自身が行うものであり、マスターはただ呼びかけるだけでいい。難しい手順も何もなく、定められた詩文を謳い上げればそれだけで事足りる。

遂に最高潮を迎える乱流。二人は共に最後の一節を声高に叫び上げた。

「……汝三大の言霊を纏う七天」

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ……！」

詠唱の完成と共に咲き乱れていたエーテルが霧散する。世界の外側より招かれた者が放つ圧倒的な気配の前に、ただのエーテル流などただの一足で吹き飛ばされた。

白銀の具足が打ち鳴らす。

黄金の如き髪が風の残り香に揺れている。

翠緑の瞳が、揺るがぬ意思を秘めて己を招きしマスターを見つめていた。

そして同刻。

白の少女の前にも彼女の喚んだサーヴァントが姿を見せる。  
風を踏んだかのような軽やかな着地。  
しゃらん、と鈴の音が鳴り響く。

「問おう。貴方が」

「私のマスターなのかしら……？」

熾天より舞い降りた二人は、同時に己が主へと問いを投げ掛けた。

### 03・開戦の狼煙

/ 3

召喚成功による一瞬の弛緩。

次いで投げ掛けられた問いによる緊張。

その刹那を凌駕する殺意が、儀式場に吹き荒れる。

それも当然。本来殺し合う為に喚ばれるサーヴァントだ、召喚の直後にそれぞれの正面に打ち倒すべき敵手を見咎めてしまったのなら、安穩としていられる筈がない。

しかし招かれた者はどちらも進む殺意を滲ませながらも、互いに得物を取るには至らなかった。

切嗣の招いた白銀の少女はその身に培った修練から。

イリヤスフィールの招いた紫紺の魔女はその類稀なる頭脳から。

目の前の敵は敵ではない……と、違う過程を経ながら同じ結論に至った。

「マスター」

口火を切ったのは白銀の少女騎士。揺るがぬ瞳を己を招いた男に向けながら、確認の問いを投げ掛ける。

「あちらのサーヴァント……恐らくはキャスターと見受けませんが、どうやら私と時を同じくして招かれたようだ。ならば彼女ないし彼

女のマスターは、今のところ我々の敵ではないと判断しますが」

「……………」

切嗣は目の前に現れた少女に瞠目していた。噂に名高き騎士の王、ブリテンに覇を唱えた赤き竜が、こんな少女であったとは思ってもしなかつたからだ。

一國を背負って立つには余りにも小さな身体。吹けば飛びそうな矮躯だけを頼りに、この少女は恐らく戦場を駆け抜けたのだろう。

その力が伝説と相違ないとするのなら、彼女の实力は折り紙付き。切嗣の懸念など正しく愚考に過ぎない。

ただ心の何処かで、何かが引っかかりを覚えている。鉄の心に爪を立てられたような不快感。得も言われぬ違和感。

切嗣は幻視している。この少女に、誰かの姿を重ねているのだ。

「キリツグ」

イリヤスフィールの声を聴き、忘我の境地より立ち戻る。

「淑女に声を掛けられたのよ？ 応えてあげるのが礼儀でしょ？」

そんな場違いなほどの言葉と共に浮かべられたはにかんだ笑みに、心に澱んだ汚泥が洗い流されていく。

もしこれが切嗣単独で戦場に臨むことになっていたら、この少女とは最低限のやり取りで済ませていただろう。あるいは十年前の彼であったとしても同じことをしていたと確信を以って言える。

しかし今の状況はどう考えても説明を必要とする場面であり、イリヤスフィールとそのサーヴァントと共闘の形を取っていく以上は、会話によるコミュニケーションは必要不可欠なものだ。

目の前の白銀の騎士は切嗣にとって願いを叶える為の道具に過ぎずとも、その道具を正しく運用しようと言うのなら、最低限の連携は取らざるをえない。

一つ溜息を零し、男はようやく口を開いた。

「ああ。あのサーヴァントを喚んだのは僕の娘であり、今回の聖杯戦争における共闘の相手だ。つまりはそのサーヴァントともまた悪戯に争うことは好ましくない」

「了解しました。マスターがそう言うのであれば私に是非はない」

「だそうよ。貴方も事情は飲み込んで貰えたかしらキャスター？」

最初の問いから無言で場を睥睨していた　目深に被ったフードのお陰で視線は判別し難いが　魔女はくすりと口元に笑みを浮かべた。

「ええ、分かったわ。でもとりあえずは色々な事情の説明をお願いしたいところだけねど」

魔女の声はイリヤスフィールを通り越し切嗣へと向けられる。事情を最も把握している者が誰であるかを見抜いたが故のものだろう。

「分かっている。これから僕らの行く戦いは通常の聖杯戦争のそれを逸脱することになるだろう。元より事情は説明するつもりだった」

一陣営でサーヴァント二騎を従えることのメリットは分かりやすくとも、同時に弊害も生まれると切嗣は最初から予見していた。

その説明は必要なものであると理解していたし、ただ聖杯を取るまで敵の全てを殺し尽くす、という方針では連携が不可能なことも把握している。

たとえ相手が道具であっても語る口が必要ならば語るまで。こちらから無闇に軋轢を作ることとを最大限の運用とは言えないのだから。

「じゃあとりあえず移動しない？ サロンでお茶しながらにしまし  
よう！」

そんなイリヤスフィールの提案はにべもなく切つて捨てて余りあるが、それで円滑な関係が築けるのなら容易いと、切嗣は肯定と共に一階のサロンへとサーヴァント達を伴い向かった。

/

一階エントランスホール脇にあるサロンでアインツベルンの侍従の淹れた紅茶で喉を潤しながら切嗣は手早く現状をサーヴァント達に説明した。

「つまりは本来不可能な筈のシステムの改竄を行い、貴方とイリヤスフィールは共にマスターとなったと。そしてそのサーヴァントである私達にもその関係を同様のものとして欲しいと」

「端的に述べるのならそれで間違いはない」

キャスターの要約に切嗣は首肯を返す。

「少なくともこれで僕達は他の参加者からは優位な立場に立つことが出来る。最優と目されるセイバーと権謀術数に長けたキャスターの連携があれば遅れを取るなど有り得ないだろう」

「そうね。何事もなければ最終局までは有利に事態を進められるでしょうね」

それは棘を滲ませた言葉だった。彼女が鬼謀に長けた魔女であるのなら、当然にしてその陥穽に気付かない筈がない。

「聖杯を獲得出来るのは一組だけという触れ込みらしいけれど？それはどうするの？」

切嗣とイリヤスフィールは同じ地点を目指しているから構わないが、セイバーとキャスターが共に聖杯に招かれてその頂を目指す者である以上、その一点は譲ることが出来ないものだ。

「特に私は最弱にも等しいキャスターよ。堅牢な対魔力を有するセイバーと最終局面でかち合えばどうなるか、語るまでもないわよね？」

切嗣に認識出来るセイバーの対魔力は最高位。およそ現代の魔術では彼女に傷をつけることさえ叶うまい。

如何にキャスターが秀でた魔術師であったとしても、魔術師である以上は真正面から戦いを挑んでセイバーから勝ちを掴むことは至難を極めると言えるだろう。

それが故の険を滲ませた物言い。都合良く使い捨てるつもりならこの場で争うことも辞さないという心積もりで彼女は憤怒を滲ませている。

そう、彼女にとって都合よく利用されることほど許容出来ないものはない。生前誰かに振り回され続けた魔女だからこそ、そんな戯言は許せない。

綺麗事でお茶を濁そうものならどんな手段に出るか彼女自身分からない。少なくとも、この城が無事で済むとは思えない。

「大丈夫だよ」

そつとキャスターの手に添えられる少女の掌。怒りに打ち震えていた魔女の手を、聖女の掌が優しく包み込む。

「私が願いを叶えてあげる。キリツグの願いもセイバーの願いも、勿論キャスターの願いだってね」

「  
」

聖杯の器にして守り手である少女は謳う。余りにも戯言じみた夢想を誰憚ることなく言っただけだ。

この身が誰かの祈りを叶える聖杯の器であるのなら、その成就に尽くしてくれた者の祈りの全てを叶えて見せると。

どうやって。

不可能だ。

有り得ない。

それは逸脱し過ぎている。

何の根拠があつて。

胸に渦巻く疑心がキャスターの喉を衝いて出るその寸前、

「……事実として」

切嗣は瞳を伏せたままに割り込んだ。

「世界の内側に限り作用する祈りの全てを叶えるだけの力が聖杯にはある筈だ。勝者にしか聖杯は使えないというのは外来の魔術師を誘き寄せる為の餌に過ぎない。」

文字通りに聖杯が万能の釜であるのなら、マスターとサーヴァントに加えて後一人分の願いを加えても許容量を超えることはない」

切嗣とて確信があるわけじゃない。三度の闘争を経て未だ完成に至らない聖杯なのだ、その真実を知る者は誰もいまい。ユーブスタクハイトならば知っているのかもしれないが、尋ねたところで口を割るとも思えない。

少なくとも聖杯の触れ込みに虚偽がなければ全ての祈りは叶う筈だ。ただその為に、他の参加者を駆逐しなければならぬという事実には何の変わりもないのだが。

「だから信じてキャスター。貴方の願いもきつと、私が叶えて見せるから」

ただ一人の勝者を選定するのには理由がある。聖杯の成就是英霊の魂によって成されるもの。ならばその完成形は七騎全ての英霊が消滅した後にこそあり、切嗣の願いを叶えるくらいならば一騎残っ

ていても支障はない。

ただし二騎のサーヴァントが存命している状態で、聖杯がどのくらい機能するのかまでは分からない。だから切嗣の言葉もイリヤスフィールの言葉も裏を返さずとも無根拠な物言いに過ぎない。

魔女の疑心を晴らすには足り得ない。

「……分かったわ、信じましょう」

けれど魔女は、肯定の言葉を吐き出した。

「ただし信じるのはセイバーのマスターでも聖杯でもない。私のマスターを信じることにするわ」

「ほんとう……?」

「ええ。少なくとも貴方がセイバーのマスターの味方である限りは、セイバーとの共闘を約束しましょう。」

けれどあくまで手を貸すだけ。私は私のマスターの守護を優先するし、独自にも動かさせて貰うけれど、それくらいは構わないのでしょうか?」

「ああ、充分だ」

イリヤスフィールのサーヴァントを選定する際、最弱と目されるキャスターを選んだのはその為でもある。

他のクラスのサーヴァントを招来すれば、より強力な守護者を招くことも可能だっただろう。それでも切嗣はキャスターを選んだ。

神殿の構築による防衛能力は魔術師の英霊だけが持つ特性だ。単騎では限界のある防壁も最優の騎士が味方であればより堅牢な要塞

となる。

キヤスターに期待しているのは最低限の助力と最大限の守護。キヤスターからの提案は切嗣にとって願ってもない申し出であった。

それでも腹の底を見せていない魔女に完全に信頼を寄せるのは危険だが、その為のイリヤスフィールだ。彼女のマスター適正は過去最高であり、その身に宿す令呪も規格外だ。たとえセイバーであっても容易には逆らえない。

そんな切嗣の懸念とは裏腹に、魔術師の英霊は喜色を浮かべて見上げてくる赤い瞳に小さく微笑みを零す。全てを見通したわけではない。だがそれでも分かる。この少女はかつての自身と似ているのだと。

外の世界など知らず、完結したこの城の中で生涯を過ごすことを約束された箱入り娘。これより巻き起こる闘争にも、決して彼女自身の意思で赴くものではない筈だ。

……この男が、彼女を利用する為に戦地に連れ出そうというのなら……

裏切りの魔女は心の奥底で決意を固める。自身と同じ悲劇は起こさせない。あんな悲しみはもう沢山だ。元より聖杯になど希うものなどない身の上だ。彼女がその心に宿している祈りは、本当にちっぽけなものではないのだから。

それでも今は静観こそが正しい選択。自らの足場を固めるまでは、最優の実力を利用して貰うとしよう。

涼やかな面持ちで、そんな打算に塗れた策謀を魔女は巡らせてい

た。誰に気取られることもなく。

「これで状況は整ったわけですね」

これまで沈黙を貫いていたセイバーが場を仕切り直す。

「私自身にもキャスターとの共闘に差し挟む異論はありません。マスターの意向であるのなら尚の事だ。ならば次はより具体的な共闘方法について話し合うべきでしょう」

ただ肩を並べて襲い来る敵に立ち向かうだけが共闘ではない。特に前線に立つべきセイバーと後方支援に長けたキャスターの共闘であるのなら、その具体案について話しておかなければ取れる連携も取れなくなる。

セイバーは自身の能力を過小にも過大にも見ていない。キャスターの手など借りずとも敵は全て倒せるなどとそんな戯けた豪語など有り得ない。

事実として仮にセイバー単騎であったとしても他の英霊達に遅れを取るなどないだろう。それでも目の前により戦局を優位に運べる状況があるのなら、それを利用しない手はない。

彼女は聖杯へと辿り着く最短経路を駆け抜けるだけ。利用できるものを利用し、踏み台になるものを蹴り飛ばして頂を目指し駆け上がるのみ。

胸に秘めた譲れぬ祈り。その成就の為に清濁併せ呑み、屍山血河を渡ることを厭わない。

……この身はただ一振りの剣であればいい。祈りを叶える為の道

具で構わない。

尊い祈りの為、自らの身を削ることを恐れぬ最優の剣士が、静かにその心を水底へと沈めていく。

己がサーヴァントからの目配せを受けた切嗣が切り出す。

「作戦については幾つかプランを用意してある。現地の確認がまだ済んでいない以上完全なものとは言い難いが、とりあえず説明をさせて貰う」

テーブルの上に戦場の見取り図を広げながら、切嗣は説明を開始した。

築き上げられた共闘関係。

魔術師殺しと聖杯の守り手。

最優の騎士と最弱の魔女。

鳴り響く時計の音。

敵かにベルがこの場に集う者達の前途を祝福する。

彼らの戦いは、今この時よりの開幕を告げたのだった。

/ 4

冬木市。

冬でも比較的温暖な気候下にある地方都市。海に面し山に囲まれ

た、今なお成長を続ける新興都市。それが聖杯を巡る争いの戦場の名前だった。

市の中心部を流れる未遠川に架かる冬木大橋を境に古くからの町並みを残す深山町と近代建築の立ち並ぶ新都とに分けられる。

その丁度中心地である冬木大橋を渡る一台の車に、切嗣とセイバーの姿があった。

北欧のアインツベルン城での作戦会議から数日。遂に彼らは戦場へと乗り込んだ。基本的に霊体であるサーヴァントは姿を消すことが可能であるが、このセイバーにはそれが不可能らしい。

その為目立たぬよう　イリヤスフィールが見立てた　現代衣装で身を飾り、少女はマスターの傍らに座っていた。

イリヤスフィールとキャスターとは別行動だ。キャスターは何やら切嗣が近くにいと不穏な気配を撒き散らしているし、イリヤスフィールに訊いたところによると普段はそうではないらしい。

何が原因かは分からないが、キャスターは切嗣を疑っているようだ。

……神代の魔女、それも裏切りの魔女に疑うなという方が難しいか。

少なくともイリヤスフィールとの間に軋轢がないのならそれで構いはしない。彼女達は彼女たちで上手くやるだろう。

まず切嗣達ができるべきことは戦場の把握と拠点の確保だ。何度か偵察に来たことのあるものの、成長途中の街並は一年もすれば様変

わりしている。

地図上からでは得られない情報を得るべく、切嗣はセイバーを伴い夜も更けた場合に、冬の寒風が吹き荒ぶ橋上に車を走らせていた。

深山町に構える遠坂と間桐の邸宅を素通りしつつも確認した後、確保した新都のホテルに帰還しようとしたその矢先だった。

新都の目玉である冬木市民会館と並ぶもう一つのシンボル 通称センタービル。その頂上に煌く赤い光が、僅かに明滅した。

「切嗣ッ……！」

セイバーの怒声に切嗣の身体は反射する。無理矢理にハンドルを切ろうとしてそれすらも間に合わない判断し、強化『されていた』身体能力を以って迫る死の気配から刹那にして車外へと躍り出た。

しかしそんな離脱を嘲笑うかのように、慣性で走り去る車は空より降り注いだ凶つ星に射抜かれて、爆発し炎上した。

「マスターっ、上です……！」

既に戦支度を整え終えていたセイバーは下段に不可視の剣を構え遙か空の彼方を睨んでいる。切嗣もまた瞬時に意識を切り替え、強化した視力で以ってこの街で最も背の高い建物を見上げた。

地上の星と夜空の星の狭間に立つ二つの影。

共に真紅のシルエットを背負い敵手はこちらを睥睨している。

一人は赤い外套に身を包み、片手に弓を携えた男。

狙撃の下手人であり、夜の黒に映える白髪と鷹の如き双眸を持つ

弓兵の英霊。

一人は赤いコートを羽織った少女の姿。

恐らくはアーチャーのマスターであろう黒髪の女魔術師。

冷徹な色を湛えた瞳が無感情に揺れている。

敵は遙か彼方。

この位置取りは敵の独壇場。

白兵戦闘に長けたセイバーには、この距離で為す術などありはしない。

敵の優位を突き崩せなければ、今宵切嗣とセイバーは脱落を余儀なくされるだろう。

魔術師殺しが空を睨む。

次弾を番えられた弦の撓りさえも見通して、開戦の合図を見る。

……いいだろう。己とセイバーの性能を確認した後、あの敵手を打倒する！

緒戦の幕が開く。

戦いは既に、激化の一途を辿る未来を予見していた。

### 03・開戦の狼煙（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます。

一応ここまでがプロローグのつもりです。

基本書きたいことは作中で書こうと思ってますのでここではそんなに語る事はありません。

それでは、これからも楽しんで貰えるよう鋭意執筆に励んでまいります。

## 04・剣と弓

/ 5

天と地の狭間。

夜の闇とそれを照らす地上の明かりの境界線上に、真紅の主従は並び立つ。

射手は第一射を放ったままの姿勢で着弾点を見やり、車内から逃れ超遠距離からの奇襲狙撃を回避せしめた主従を見咎め、細めた双眸を僅かに見開いた。

敵である彼らがこの予見さえ不可能な筈の狙撃を回避したからではない。彼と彼女の存在にこそ、瞠目せざるを得なかった。

いや……彼らが敵であると認識していたからこそ狙撃を行ったのだ。それでも何かの間違いではないかという思いを、晒された姿を見て消し飛ばされたのだ。

「外したわね」

冷たい視線を眼下へと投げける主の色のない言葉が吹き荒ぶ強風の中に零れる。赤い弓兵は動揺を心の奥底に押し込め、視線を横へと投げ掛けた。

「敵はこちらが矢を放つ前に反応したようだ。でなければ回避など不可能な一射を放ったつもりだ。サーヴァントはともかく、マスターは殺せると踏んでいたのだがな」

「言い訳は必要ないわ。次の矢を番えなさい」

「……了解した、マスター」

まるで感情のないマスターの言葉に従い、アーチャーは次弾を弓に番える。

召喚からこつち、何もかもが彼の想像と思惑を裏切り続けている。何が原因であるかなど考察するだけ時間の無駄だ。どうせ答えなど現段階で導き出せる筈もなく、その答えを知ったところで胸中に渦巻く絶望は拭い去れない。

自らの目的から逸脱した聖杯戦争。己を招いた少女に感じた違和感が、彼らの存在を認識することで確固のものとなった。

確信は彼の絶望をより深く黒く塗り潰すもの。聖杯では叶わぬ願いを抱く、アーチャーの一縷の希望を断つにも等しい結果論。

胸に秘めた願いが叶わぬものと知りながら、それでも弓兵は弓を執る。

「……………」

引き絞られていく弦の軋みを強風の中に聞きながら、少女は視線を眼下に向けたままに髪を僅かに掻き上げた。

彼女にとつても誤算の連続。本来彼女が招来しようとしたサーヴアントは父が収集した触媒の中でも選りすぐりの一つを用いた黄金の君。遍く英霊の頂点に位置する王者である筈だった。

召喚には一切の不備はなく、粗さえも見当たらなかった。完璧と

呼んで相違ない入念な準備の上、父の期待を背負い行った召喚は、意中のサーヴァントを引き当てる事が出来なかった。

今、傍らに立つ弓兵は彼女　遠坂凜の喚び出そうとした黄金とは異なる者。

何が原因でこの赤き弓兵が招かれたのかは分からない。何故黄金の君が凜の呼び声に応えなかったのかは永遠の闇に葬られたまま。

凜は己の喚び出したサーヴァントと共に十年遅れの聖杯戦争を勝ち抜かなければならなかった。

現在このセンタービルの屋上に陣取り、緒戦の幕を開いたのもその為だ。父の落胆を払拭し、アーチャーの実力を確かめる為の試運転。<sup>転。</sup>

自身の名を思い出せないなどと嘯く英霊崩れにせめて力量を披露させようという凜の思惑だった。

少女と呼んで差し支えない年齢で既に魔術師として半ば完成に至った少女は、そんな出来ない己のサーヴァントに欠片も信用を預けていなかった。

周囲に張り巡らせた感覚の糸は弛まぬままに引き伸ばされ、若干背の低いビル群は元より眼下、頭上をもその監視範囲に据えている。

流石に数キロも先の標的を発見出来たのはアーチャーの慧眼があつてのものだが、認識さえすれば姿形を目視することなどそう難しいものではない。

引き絞られた弓より放たれる第二射。夜の闇を引き裂く赤い魔力を込められた必殺の魔弾は吸い込まれるように標的に向かい、今度は真正面から迎撃された。

「……………」

アーチャーは決して手など抜いていない。矢に込められた魔力の力強さは凜をして瞠目に値するもの。迎撃が可能なのは同類たるサーヴァントだからであり、それを真正面から斬り捌けたのは敵の手腕に拠るところが大きい。

風が渦を巻いているかのように刀身を覆い隠す不可視の得物。構えから見る限り、槍使いではないだろう。

……ならあれがセイバー。最優の誉れ高き剣の英霊。

父が最強の英霊の触媒を所有していなければ、凜もまた最優の英霊を求めていたことだろう。それだけセイバーというクラスが有する能力値は破格であり、他のクラスを圧倒して余りある。

しかしそんな追憶こそが詮無きもの。既に召喚は行使され、傍らには招かれし紅の弓兵の姿がある。

素性は不明で宝具の正体すら不確か。信頼を預けるにはおよそ不適格であり、共に戦場を駆け抜けるには不足であり不満がある。

この男が嘘を吐いていない証拠はなく、真実を黙秘している可能性も考えた。令呪に訴えることも可能だったし、それを補うだけの計略も存在した。

凜はそれら全てを一笑に附し、現状を維持することを求めた。

完璧であり完全であることを望まれ、そう振舞い続けてきた彼女らしくもない愚策。しかしそれは彼女にしか理解し得ない矜持ゆえ

のものであり、たった一粒胸に残った遠い郷愁の残滓。

「アーチャー」

「なんだ」

告げられるまでもなく次弾を装填しようとしていた従者は視線を向けぬままに応える。

「貴方は最初、言ったわよね。この私が召喚した者が、最強でない筈がないと」

喚び出そうとした黄金の君よりも、この自身こそが少女には相応しいと、そんな大言壮語をのたまった。

父はそれをこそ失笑で済ませ、召喚の場を後にしたが、凜は違った。

この弓兵の招来が遠坂家に根付く忌まわしき呪いの産物ではなく、別の何か　凜の及びもつかないものから齎されたギフトであるのなら、この召喚には意味があるのではないかと考えた。

如何なる聖遺物を用いようと遠坂凜はこの弓兵を招く運命にあった……そんな乙女チックな妄想は心の贅肉と切り捨てるべきノスタルジーだが、過去を振り返ることに省みることにも今更では意味がない。

見据えるべきは今であり先だ。

この正体不明の弓兵を従えて、聖杯の頂へと駆け上がる。

「ならそれを証明して見せなさい。私に貴方は信頼に足る者だとい

う証を提示して見せて」

胸に輝く真紅の宝石を握り締め、少女は男の背中に囁いた。

弓を矢を番えたまま、従者は視線を滑らせる。力強き意思を秘めた少女の美しい瞳。吸い込まれそうなほど鮮やかな、それでいて弛まぬ決意を滲ませた双眸を見やり、僅かに口元を歪めた。

「承知したマスター。この私は君に相応しきサーヴァントだと、この一戦で以って証を立てよう」

ぎちりと軋んだ弦はより強く弓を撓らせ、込める魔力の量は先ほどの一射と二射を凌駕する。空気をも凍らせるほどの冷たい魔力の胎動が屋上を染め上げ、吹き付ける風とて生温く感じるほどの刃を為す。

冷徹な魔術師。

彼の知る彼女ではない誰か。

それでもきつと、彼女は変わることなくあの少女である筈だ。

その確信を今の一言で得ることが出来た。

ならば後は、向けられた信頼と期待に応えるのみ。

……この狂い回る戦いの緒戦を、貴方と君を相手に行えることもまた、与り知らぬ何かの縁なのだろう。

遙か見据える敵手に一方ならぬ想いを馳せながら、彼の手にする矢は波動の高鳴りを続けていく。

……手は抜かない。この身は遠坂凜の騎士だ。目的の果たせぬこ

の世界で、ならば彼女の為にこの手は剣を執ろう。

胸を過ぎる追想。

遠い日の記憶。

降り頻る雨の中に見た笑顔。

月の雫の舞う静かな夜の逢瀬。

郷愁を断ち切るように。

番えられた矢は射手の手を離れ、暗い夜に墜落を開始した。

/

空より降る紅の星。

溢れる魔力は尾を引き、まるで彗星のように地上へと落下する。

遙か数キロもの彼方から刹那の内に迫る魔弾を迎撃するのは最優の剣士。主たる切嗣をその背に庇い、橋上にて迫る二射を弾き飛ばす。

「はあ………！」

衝突は一瞬、弾き飛ばされた矢は空中を舞い川面へと消えていく。後に残ったのは冬木大橋の鉄骨を軋ませる残響だけだった。

「マスター、指示を！」

切嗣を背にしている以上、セイバーは独断では動けない。セイバ

ーが敵手目掛けて切り込めばマスターを無防備に晒すことになる。  
こんな馬鹿げた遠隔射撃はたとえ魔術師であろうと迎撃など不可  
能だ。鷹の目を持つアーチャーからは逃げることで難しい。

攻めるにしてもこの距離だ、詰め寄るだけで嵩張るほどの時間を  
要するし、その間マスターを庇い続けるのはセイバーとて厳しいと  
言わざるを得ない。

だからセイバーは指示を求めた。攻めるにしる退くにしろ、切嗣  
の意思がなければ立ち行かない。

「……………」

切嗣は冷静に状況を観測する。

今この場での最善を、持ち得る札の中から選択する。

迫る三射。先の二撃よりもなお膨大な魔力を注ぎ込まれた矢は、  
セイバーの剣戟に弾かれこそしたものの、より重い響きを伴い冬木  
大橋を揺るがした。

この状況はアーチャーの独壇場。彼我の距離は狙撃手の間合いだ。  
他を寄せ付けぬ一方的な連続射撃。このまま続ければ何れセイバー  
は膝を屈し、切嗣諸共に微塵も残さず吹き飛ばされるだろう。

「セイバー、全力でアーチャーの下まで駆け抜ける」

切嗣の選択は後退ではなく前進。

聖杯の頂を目指して何処までも駆け上がるのみ。

「なっ!? それではマスターが……………!」

「問題ない。おまえの速度についていく」

切嗣の身を包む強化の魔術。アーチャーの第一射から逃れることを可能とした脅威の身体強化はキャスターからの恩恵だ。

切嗣がイリヤスフィールのサーヴァントを選択する時、他のクラスの優位を捨ててまで欲したものこそが魔女の恩恵に他ならない。知り得る限り最高峰の魔術師として有名を馳せた裏切りの魔女を、その性質を度外視してまで求めたのはその為だ。

無論イリヤスフィールの防護面からの選択が第一であったが、切嗣にも恩恵を授けられる者となればキャスターのクラス以外に有り得なかった。

イリヤスフィールの破格の令呪を以つてすれば魔女の裏切りを防ぐこともそう困難なことでもない。何より切嗣の監視の目とセイバーの剣がある限り、あの魔女は従い続ける他ないのだ。

リスクを封じた上で手にした神代の魔女からの強化付与。切嗣が自身に施すものより数段位階の高いそれは、彼女の力量の高さを物語る。

けれどそれでも切嗣は所詮人間だ。破格の恩恵を授かるうとも、英霊の全力疾走には届くまい。

それを覆すものこそが、

「固有時制御 (Time Alter)」

切嗣自身が求めた魔人の力。

「 三倍速 (triple accel) 」

セイバーとの繋がりを得ることで効力を発揮する聖剣の鞘の回復能力。自身の力量を超えた魔術行使による破滅とて、その超速再生は覆す。

ただしそれは不死を約束するものではない。あくまでダメージを回復するに留まり、ダメージそのものを完全に無効化するには至らない。

切嗣は体内で炸裂する固有時制御の反動を聖剣の鞘の回復能力で癒しながら、残る鈍痛に耐えて英霊に拮抗する。

駆け出した切嗣の疾走は最速の呼び声高いランサーには劣るものの、もはや人間の領域を逸脱していた。

切嗣に遅れることコンマ以下でスタートを切ったセイバーとて、気を抜けば刹那の内に追い抜かれかねないほどの超加速。

神代の魔女の強化と聖剣の鞘の加護。双方がなければ為しえない限界を超越した疾走を以って四射目の矢が放たれるよりも早く大橋を渡りきる。

迫る轟音。

大気を斬り裂く破裂音。

標的に近づいた分だけ威力は増しており、込められた魔力量もまた増大している以上、先の魔弾よりも強烈な威力を伴い彗星は飛来する。

されど魔術師殺しの傍らにあるのは最優の誉れ高き剣の英霊。その中でも最上位にも程近い場所に座するこの白銀の騎士の力量を以

つてすれば、捌き切ることなど何ら難しいものでもない。

足を止めぬままに魔力放出を踏み切りに乗せ、切嗣の前に躍り出たセイバーは四射目もまた斬り伏せる。甲冑越しに手を伝う衝撃を受け流し、止まらぬ疾走を続けるマスターへと追い縋る。

次の狙撃がより強力な魔力を込めたものである仮定するのなら、次弾発射までの予測時間は三十秒を越える。今の切嗣とセイバーの速さならば、街中へと充分に辿り着ける。

人気の疎らな深夜とはいえ、駅前広場には僅かではあれ人影はあるだろう。そこまで辿り着けるのなら敵はもう安易な狙撃は出来なくなる。

無関係な人々の犠牲を厭わず、神秘の露見さえ恐れなければなら可能だろうが、な緒戦でそこまでの無理を行う者は少ない筈だ。

だから人気のあるところまで行けば魔弾の射手から逃れることは可能だが、

……それでは決定的な勝利にはならない。

アーチャーの狙撃能力を看破した今、そのまま捨て置いていい筈がない。

弓兵の精密射撃を以つてすれば先のように認識の外から狙い撃つことは難しくはないだろう。

ここでアーチャーを取り逃がすと言うことは背中に憂慮を残すということ。

拠点で眠りに落ちた瞬間に矢が襲ってくるかもしれない。他の敵

との戦闘中に横槍を入れられるかもしれない。いつ寝首を掻かれるかと怯えたまま、戦い続けることほど恐ろしいものはない。

自身も狙撃の心得のある切嗣だからこそ、アーチャーの脅威を見誤らないのだ。

……初撃で殺せなかったことが最大の失策であり、そのまま姿を消さなかったこともまた落第点だ。

狙撃の信条は一撃必殺。殺せると確信するまで引き鉄を退くことは許されず、もしも外してしまったのなら存在を悟られる前に離脱すべきだ。

あの弓兵が如何に高い狙撃能力を有していようと、狙撃手としての心構えが足りていない。ならば刺せる隙は充分にある。

止まらぬ疾走を続け、敵の注意を引く為に駅前広場を迂回しセンタービルを目指す。途中降り注いだ牽制と思しき流星群は全てセイバーが捻じ伏せた。

そしてビルの立ち並ぶオフィス街へと侵入を果たす。センタービルはもう目の前。オフィス街へと入ったことで、狙撃は容易ではなくなっている。如何に新都で最も高い場所に陣取るうとも、雑多な街中にあの威力の矢は放てまい。

しかし切嗣にもまた誤算があった。

彼の考える狙撃の常識はあくまで人の領分だからこそ常識足りえるもの。人の領域を逸脱した、人ならざる英霊にとって、そんな当たり前は通用しない。

耳を劈く金切り音。高く大気を軋ませる轟音を伴い、その漆黒の

牙は飛来した。有り得ぬ方角から。センタービルより放たれた魔弾は、空の果てで軌道を捻じ曲げ、定められた標的へとその進路を折り曲げた。

「くっ……！？」

セイバーをして足を止め十全な姿勢で受け止めなければならぬほどの魔力を込められた魔弾。切嗣達がこの距離まで肉薄することを始めから想定していなければ叶わない威力を伴い、そしてその真価は次の一瞬にこそ現われた。

弾き飛ばした筈の矢が空中で旋回し、変わらぬ威力を秘めたままに再度セイバー目掛けて飛来する。

其は標的を射抜くまで疾走を止めぬ漆黒の牙。  
射手が存在し続ける限り永劫外れぬ照準を約束する魔剣の鏃。

赤原を往く緋の猟犬が、その顎を重く開いた。

追尾性能を持つ矢を放ったことでセイバーの足は止められた。如何なる威力の魔弾にも対応して見せた剣の英霊をして、幾度斬り払おうと弾き飛ばそうと舞い戻る音速の矢には対処し続けるしかない。

彼の猟犬に抗する手段は二つだけ。魔剣を叩き折るか、射手を殺害する以外に逃れる術はない。

かなりの距離まで迫られたとはいえ、未だこのセンタービルの麓にさえも辿り着けていない彼らでは、遥か高みに位置するアーチャーを害する手段はない。

遠距離から抗する手段がないからこそ接近を望んだのだ。弓兵の間合いの外である、白兵戦の距離まで詰め寄る為に。

しかしそれもこれまで。どれだけ手を伸ばそうともこの場所まで彼らの手は届かず、永遠に猟犬は追いついてくる。それはまるで、ティンダロスの猟犬のように。

「……………駄目押しをしておくか」

静かな声でアーチャーは言い、手の中に矢を具現化する。それは先に放った漆黒の牙と全く同じ形状の魔剣。永遠に追尾する二匹目の猟犬だった。

「……………」

その様を見た凜はアーチャーの弓兵としての圧倒的な狙撃能力にある程度の納得を得ながらも、同時に不可解な感覚に襲われていた。

先に放った矢の数々は弓兵として持ち得る通常の矢弾だった。

無論英霊の狙撃に耐えるだけの神秘を内包していたのだろうが、宝具ではないという確信があった。

しかし今し方放った魔剣は明らかにそれらと格を逸していた。英霊のシンボルたる宝具の属性を帯びた代物だと思った。

ならば今、アーチャーが弓に番えているものは何なのだ？

全く同じ形状で同質の神秘を宿す宝具など存在する筈がない。ならばこの弓兵の秘奥は別のところにある筈だ。

あの魔剣が複にの分裂を可能とする性質を宿しているのか、アーチャー自身が複製の能力を有しているのか。

如何なる回答にせよ問い質したところでこの弓兵は答えないだろう。それがより凜の猜疑を深くしているのだが、事実として弓兵としての戦場ならばセイバーにさえ劣らない実力を示した彼には、誠実を以って応えなければならぬ。

「凜、それくらいにしておいてはどうだい？」

今にも魔剣を放とうとしていた赤い背中に凜が声を掛ける直前、割り入るように第三者の声が木霊した。

「お父さま」

階下へと続く扉から姿を見せたのは遠坂家五代当主である遠坂時臣。誰知らぬ、凜の実父だ。

「何故此处に……」

「娘の初陣だ、気にならない父などいまい？ それも望んだサーヴアントではない従者を従えてのものであるのなら、心配も当然のものだろう。まあそれも、どうやら杞憂であったようだがね」

コツ、と石畳を革靴が打つ。

「アーチャー」

弓を引き絞り張り詰めさせたままの姿勢で、意識を眼下の敵から逸らすことなく弓兵は視線だけを動かした。

「君の実力は拝見させて貰った。我らの望んだ黄金の王とは比べるのもおこがましいのだろうが、それでも君は弓の英霊としては充分以上の力量を有していると判断しても構わないと私は思う。

素性が分からないのが唯一にして絶対の難点ではあるが、まあ構うまい。先日の非礼についても詫びさせて欲しい」

「……それで？ それを言う為だけにわざわざ戦場に赴いたのではないのだろう」

「ああ。時は未だ緒戦、これ以上手の内を晒すのは上手くない。君の狙撃能力は驚嘆して余りあるが、少々派手にやりすぎた。今宵の戦い、恐らく他の連中に覗き見られていると考えて間違いない」

冬木の中心街から冬木大橋にかけての遠距離射撃。それだけでも

充分に目立つつというのにセイバーの足を止める為に手札の一枚を晒してしまった。

セイバー陣営の能力についてもある程度把握出来たからこそ帳尻は合うが、時臣からすればこの場でセイバーを仕留めることよりも盗み見ている連中にタダで情報をくれてやるのは気に入らない。

同時にこの地を預かる管理者としてもこれ以上の戦闘行為は容認し難い。如何にこの戦争が街中で行われるものであっても、神秘の隠匿は絶対条件。

手の内の完全に読み切れていないセイバーを打倒しようというのならより強力な手段に訴えなくてはならなくなり、それは神秘の露見は元よりこちらの更なる手の内を晒す愚考に繋がるものである。

「今夜はこの辺りで矛を収めてほしい。君にしても我らにその実力を遺憾なく見せ付けられたのだから、目的は充分に果たせただろう」

「それは決めるのは私でも貴方でもない。私の行動を決定しても構わないのはマスターである凜だけだ」

二対の視線が少女へと降り掛かる。凜は動じることなく現状を俯瞰した上での結論を口にした。

「……そうね。この戦いを盗み見ていた輩も含め、アーチャーの脅威は充分に伝わった筈だわ。だからこの辺りで退くのは間違っていない」

切嗣も懸念したアーチャーの狙撃能力の高さは、弓兵が生存しているだけで効力を発揮する。同時に敵に狙われやすくなるリスクもあるが、その対策についても十分な手段は既に講じてある。

「でも……お父さま。その決断を下すのは少し遅かったみたいです」  
「なに……？」

遙か天上にて戦場を俯瞰していた彼らの眼下、時臣の登場により戦局が硬直していた間に事態は既に動き始めていた。

/

濁った水の流れる下水道。汚れと腐敗だけが闇に同化している、そんな誰もない暗闇の中に一人の男が佇んでいた。

目深に被ったパーカーの下に隠れている髪は色素が抜け落ち白く染まり、閉じた片目が映し出す視界には汚泥の如き闇ではないものが映り込んでいる。

この下水道の遙か頭上、地上で戦端の切られた戦いの舞台を使い魔の目を通し備に観察していた。

「クク……クハ……」

零れる笑いを噛み殺し、男は見えない空を仰ぎ見る。

十余年の昔より敵と見定めた男の登場を見咎め、その存在を認め、噛み締めた奥歯をぎちりと噛み砕く。

心の奥底より湧き上がる負の想念。胸に渦巻く憎悪の奔流をたった一つの確固たる意思で諫め、されどより猛き熱情を以って謳い上げる。

「さあ……出番だ」

憎悪を塗り潰す殺意の波動。彼のただ一つの願いである少女の幸福を貶めた男に対する想念は、長い年月を掛けて積み上げられ、その頂などとうに見えなくなっていた。

それでも彼は狂っていない。憎悪に身を任せ狂ってしまったのは少女を救えないのだと自覚しているから、あくまでも冷静に激情に身を焦がす。

本来ならば命の炎の限りを燃やし尽くして挑まなければならなかった男に、十年の研鑽を以って挑むことが出来ることに感謝する。

理由の分からない開幕の遅れは、彼の寿命を引き伸ばし、手に入れない筈の力を齎した。

一度は背を向けた魔道に向き合い、少女に背負わせてしまった荷物を引き受けた。過酷は身を引き裂くほどの苦痛を齎し、苦痛は力となって昇華された。今の自身の力ならば、誰に劣ることも有り得ない。

「さあ……行け」

右手を焦がす熱に命令を下す。自らの喚び寄せた最強の一を、あの男の首を刎ね飛ばす為に使役する。

翼を引き千切られた少女に、片翼となった彼女に、今一度空の青さを見せて上げる為だけに、彼は地獄より這い上がったのだから。

たった一つの無垢な想いを黒き想念で覆い包み 間桐雁夜は剣を振るう。

「さあ……おまえの力を俺に示せ。あの男に組するサーヴァントを  
駆逐し、その実力を見せ付けるがいい　セイバァァ（……………）  
……………！！」

/

猛然と襲い来る猟犬を斬り捌きながら、セイバーはぎちりと歯を  
噛んだ。

何度弾き飛ばそうと魔剣はその度に旋回し、大地に打ち込んでも  
同様に速力を落とすことなく襲い掛かってくる。

これは追尾の性能を秘めた宝具に間違いはあるまい。魔剣を破壊  
するか射手を倒さなければ文字通り永遠に追い回されることになる。

しかし状況を一刻を争う。このまま手を拱いていてはアーチャー  
が次弾を放てばそれだけで捌き切れなく可能性がある。

宝具を破壊するのは同じ宝具であっても困難を極める。所有者の  
意思があれば容易なものでも、敵対者がそれを為そうとすれば相応  
の破壊力が必要だ。

セイバーにはそれを為す宝具があるが、その解放を行うのは多大  
なるリスクを伴う。緒戦で、しかもこんな街中で真価を見せていい  
ものではない。

であるのなら、選択は一つしか残されていない。敵手を討つ  
それでこの魔剣は効力を失う筈だ。

「マスターッ！」

己が従者の呼び掛けよりも先に切嗣は動き出していた。センタービルはもう目の前だ、中に侵入を果たせば弓兵の矢も届かない。

これより先はセイバーの援護は望めない。切嗣単独で全ての状況に対応しなければならぬ。

しかしそんなもの、戦闘が始まる前より覚悟していたことだ。単独でも英霊に対抗する力を得る為に、幾つもの布石を打ってきたのだ。

此処で女の背に隠れて見ているだけなんてのは、余りにも不甲斐がなさ過ぎるだろう。

ホルスターより魔銃を引き抜き、切嗣は大地を蹴ってセンタービルを目指す。その行動の意味を即座に察知し、セイバーもまた即応する。

セイバーにとって最大の懸念はどう足掻いても切嗣の存在だった。英霊に拮抗する速度で此処まで駆け抜けたことには驚愕したが、それでもやはり憂慮すべき存在には違いなかった。

切嗣の性能を完全に把握出来ていないからこそその陥穽だが、切嗣が鞘の存在を黙秘している以上は是非もないことである。

しかし切嗣が仮初めとはいえ安全地帯に身を隠してくれるのなら状況は変わってくる。執拗に追いかけてくる獵犬にも対処の仕様が出来るというもの。

「行くぞ……！」

幾度目かの反転から飛来を渾身の一撃で斬り伏せ、同時に最速でスタートを切る。切嗣を追い越すほどの疾走を以ってセンタービル

に肉薄し、壁面へと足を掛けて一足の下に蹴り上げる。

猟犬に対処するもう一つの方法論　それは追い続ける魔剣と同等かそれ以上の速度で逃げ切ること。

セイバーの身に宿る膨大なまでの魔力の大半を加速に割り割けば、猟犬の速度に匹敵することは可能だった。

ただそれもなくまで時間を稼ぐ程度のものであり、根本的な解決を目指すのならやはりアーチャーを討たねばならない。

その為にセイバーはビルの壁面を蹴り上げ最短経路で屋上を目指す。重力の鎖に囚われ速度が落ちた分、猟犬が迫り来るがその対応にも既に慣れた。

魔剣は生き物のように複雑な動きをするわけでもなく、愚直に最速で標的を狙うだけのものだ。軌跡と速度を見切っている以上、その顎は白銀の騎士の柔肌には届かない。

「ふっ　！」

ビルを半ばまで昇ったところで追い継られ、速度を落とし迎撃する。壁面を蹴り上げてのバク転からの斬り上げで魔剣をいなし、再度壁を蹴って空を目指す。

一直線に空を目指すセイバーは天に向かって落下しているのと変わらない。一步を踏み外せば転落し、魔剣の対処を間違えれば同様に墜落するのみ。

それは綱渡りのような危険を孕む空への疾走。それでもこれが最善であるのなら、セイバーは足に込める力を微塵たりとも緩めはしない。

しかし　その綱渡りを更に過酷とするものが、天と地の両方から迫り来る。

……なっ、此処で他のサーヴァントだと……！？

頭上より来るのは想定したアーチャーの迎撃だ。五月雨のように降り注ぐ無数の矢はそう対処の困難なものでもない。

肉薄した分だけ弓兵は一射に込められる魔力量が減じている。それを補う為の手数だろうが、直感を宿すセイバーの反射と手腕の前では傷の一つもつけるにも至らない。

問題は地上より迫る漆黒の影。

直感が最大限に警鐘を鳴らし、あの敵の強大さを物語る。

敵の目的はセイバーなのかアーチャーなのか。

それが分からない以上は対処する他なく、そちらに気を割けば魔剣と矢の雨が背中を狙い撃つ。

最優の騎士をして判断を迷う刹那。

頭上に迫る矢の雨に混じり猟犬が迫り来る。そして彼方には番える弓に魔力を込め始めたアーチャーの姿さえを目視する。

……迷うなッ！　自身の直感を信じる……！

セイバーは蹴り上げる足に今宵最大の魔力を乗せ矢の雨の中に身を晒し、振るう剣は風の封印を僅かに紐解き、降り注ぐ矢群を蹴散らした。

刀身が露出するほどのものではないにせよ、セイバーは自身が秘め隠すもの的一端を緒戦にて開帳してしまった。

その無様を置き去りに、目前に迫る魔剣を打ち払う。

白銀の騎士が頭上からの攻撃に対処するということは、その速度を僅かであれ落とすということ。それは後方を駆け上がる漆黒の影に追い縋られることを意味し、事実目前まで影は迫っていた。

セイバーと同等か凌駕さえしかねないほどの疾走。墜落を恐れぬ狂走から逃れるようにセイバーもまた加速する。

その最中でセイバーは僅かに振り仰いだ。迫る影の正体を見定めようと、後方に視線を流してしまった。

それをこそが、彼女の今宵最大の失策。

「なっ……ああ……!？」

言葉にならぬ音を吐き出し、身体とは裏腹に精神が地上へと落下する。

身を覆い隠す漆黒の鎧。

隙間などなく頭部を含めた全身を覆い隠してなお理解せざるを得ないほどの存在感。

それはいてはいけない者。

存在してはならない闇の形。

何処まで逃げようと追い縋る、アーサー王の影。

……何故貴方が此処にいる……ランスロット卿……ッ！

そんなセイバーの驚愕を意に返さぬまま、黒騎士は速度の落ちた少女騎士を追い越し天へと駆け上がっていく。

アーチャーの照準が僅かにずれる。標的は白銀の騎士から黒騎士へと変更され、矢の雨よりも多くの魔力の込められた魔弾が放たれる。

既に屋上は目前。

至近とも言うべき距離にまで迫った黒騎士は、同じく至近から放たれた矢の射線上に身を晒すことになり、逃げ場のない空中でその身を穿たれる……

そう思われた時、何を思ってたか黒騎士は放たれた剣の形をした矢弾へと手を伸ばし、力任せに掴み取った。

「なっ……!!」

その驚愕はセイバーのものか、アーチャーのものか。あるいはそのマスターのものだっただろうか。

何れにせよ事実として黒騎士は空中で剣を掴み取り、手にした剣を漏れ出る黒き魔力で侵食しながら、遂に屋上へと辿り着く。

矢を放った直後ゆえの硬直を衝くように、黒騎士は手にした漆黒の剣を振り抜き裁断の刃を夜の闇に煌かせた。

がぎん、と。

黒騎士の手に返るのは肉を裂く感触ではなく。同じ鋼の硬質さを持った剣による応酬だった。

「ぶっ　よもや、こんな巡り合わせもあるとは」

黒騎士がフルフェイスヘルムの奥でくぐもつた声で息を漏らす。  
アーチャーへの斬撃を受け止めたのは彼ではない。  
彼と黒騎士との間に突如立ちはだかった、もう一人の騎士

「久しいな、ガウエイン卿」

白く輝く鎧。

誠実な色をした瞳。

太陽の如き光輝を纏う聖剣を振り抜き、白騎士は黒騎士の剣を受け止めたのだった。

#### 04・白と黒（後書き）

聖杯戦争の基本設定はほぼ把握しているつもりです。

なので諸々の疑問は後に作中で語りますのであしからずご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0500ba/>

---

罪の天秤(Fate/stay night & zero)

2012年1月3日02時45分発行